

おそろしやつげの枕のあらつくりかどある人はともと頼まじ

〔夫木和歌抄枕三十二〕千五百番歌合

皇太后宮大夫俊成卿

いくとせになれにしとこのなりぬらんつげの枕もこけ生にけり

寶治二年百首

正三位知家卿

見しま、にとこもはなれぬつげ枕されども人は行へやはしる

〔雅亮装束抄一〕もやひさしのてうどたつる事

そのまくらの左右に、八もじにしたんぢのてのごき丁をたつ中、それにそへてぢんのまくら略

ふたつををくべし、

〔長秋記〕元永二年十月五日、早旦依招引向伊豫守許、執聲間事、依日次宜所示合也、藤原公實女、嫁源有仁、中略

廿一日、巳刻著束帶行向二位經營所上皇御所大炊殿、中略實行、通季等卿顯隆朝臣所々令立調度中、後聞

帳中敷纏網疊三枚、南方置沈枕一雙、跡方置大壺、

〔兵範記〕保元三年二月九日庚子、今夜執聲事、密々營之中、寢殿東北兩面鋪設裝束、障子帳懸引物、

其内置沈枕、織物直垂、白、劍等、入、錦、袋

〔玉海〕治承四年六月廿三日甲辰、此日密々有嫁娶事、右大將良通藤原兼實子、通花山院中納言兼雅卿娘、

中略、母屋中央間立障子帳中略、其内南北妻敷纏網疊三枚、其上敷例筵著錦、綠、禮、須、用、茵、儀、敷、例、筵也、其上置沈

香枕二、

〔拾遺和歌集雜戀十九〕忠君宰相まさのぶがむすめにまかり通ひて、ほどなくてうどどもをほこび

返しければ、ぢんの枕をそへて侍りけるを、返しおこせたりければ、

涙川みづまさればやしきたへの枕のうきてとまらざるらむ

よみ人まらす